

# 生徒の歴史的思考力を伸ばす日本近現代史の授業

- 文献，絵画，写真，音声などの資料を活用して -

高等学校

(日本史)

## 1 はじめに

本校は創立100年を越える伝統校である。女子校時代が長く続いたが、平成16年に男女共学化、今年で6年目になる。「自立」を校訓に掲げ、共学化にともない新たに「文武両道」を教育目標に設定した。真面目で明るい生徒が多く、共学化は軌道に乗つつある。しかし、学習活動においては、必ずしもすべての生徒が意欲的に取り組んでいるとは言い難く、どうしても、受動的な態度になってしまう生徒も散見する。私も、「日本史の授業は暗記だけじゃないよ」と言いながら、生徒に基礎的事項を把握させるため、用語説明に多くの時間を費やさざるを得ないことが少なくない。授業はもっと生徒が楽しくいきいきと学べる場であればならないと思いつつ、教科書の範囲をすべて終わらせようと、ノルマをこなすのごとく、日々淡々とした授業になる傾向にあった。下表のデータは国立教育政策研究所が実施した「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査」である。本校でも同じ調査項目を設定してアンケート調査を行った。「全国」と「本校の『日本近現代史研究』選択者」(以下本校)のデータを比べてみると、本校の日本史選択の生徒でも同様な結果が得られた。日本史の授業は大切であることはわかっているが、自分の考えをまとめたり、発表することは少々苦手だという生徒が大半である。歴史の教員としては寂しい限りである。授業は生徒にとって楽しく学びがいのあるものでなければならない。今回の研究は、生徒の歴史に対する興味・関心を引き起こし、問題意識を高め、生徒が意欲的に学び、彼ら自らが成長できるような授業を実践したいと考えたことをきっかけに取り組んだ研究である。

質問事項	全国	本校	質問事項	全国	本校
日本史の勉強は大切だ。	60.3%	88.2%	日本史の勉強で学校の図書館等を利用して資料を集めたり活用していますか。	9.5%	0%
日本史を勉強すれば私は社会の一員としてよりよい社会を考えることができるようになる。	44.8%	35.3%	日本史の授業で、自分の考えたことや調べたことを発表する学習は好きですか。	7.8%	1.8%

## 2 主題設定の理由

日本史Bの現行学習指導要領では、「歴史の考察」の中で、歴史における資料についての学習や主題を設定して追究する学習などを通して、歴史を学ぶ基本的な方法や歴史的な見方や考え方を身に付けさせるように構成されている。

ア 歴史と資料...歴史における資料の特性とその活用及び文化財保護の意義について理解させる。

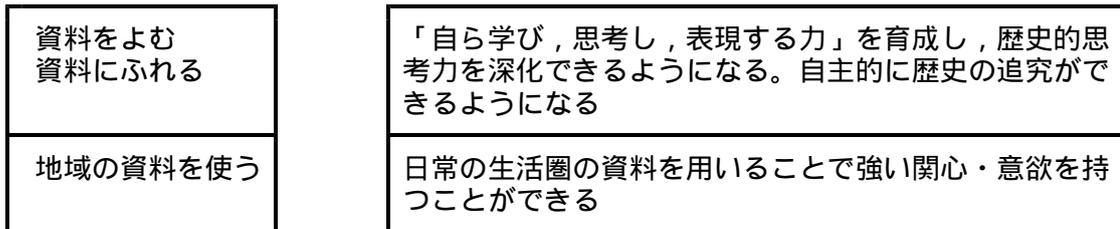
(ア) 資料をよむ...様々な歴史的資料の特性に着目して、資料に基づいて歴史が叙述されていることを理解させる。

(イ) 資料にふれる...博物館などの施設や地域の文化遺産についての関心を高め、文化財保護の重要性について理解させる。

ウ 地域社会の歴史と文化...地域社会の歴史と文化について、その地域の自然条件や政治的、経済的な諸条件と関連づけて考察させる。

現行学習指導要領の理念は「生きる力」をはぐくむことである。新しい学習指導要領でもその理念は引き継がれる。「生きる力」とは基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力である。

本校の生徒は真面目であるが、授業への取り組みは受け身がちであり、物足りなさを感じる。歴史に対するイメージも暗記科目として捉えている生徒が多く、そのため苦手意識も高い。そこで、次の2点を目標に授業実践することとした。

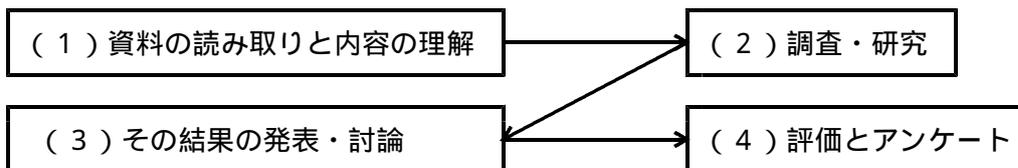


生徒の生きた学力を引き出し、伸ばさせることができる

### 3 研究方法

生徒の興味・関心から離れずに、生徒の親しみやすい具体的な資料を用いて、作業的、体験的な学習を行うよう工夫した授業展開をしていく。また、地域の素材を扱うときは、日本史全体との関係や地域社会の特色に留意していく。

話し合い・討論を数多く取り入れる。こうしたことを行うことによって、自らが獲得した知識をもとに、自分の考えを表現したり、客観的に考えることができるようになると思う。そこで、日本史の授業において、適切な単元を選んで、次のような段階を追った授業を取り入れることとし、生徒の学習の状態を研究することとした。



### 4 年間指導計画

本校の地歴・公民科の教育課程は以下のとおりである。本校では日本史Bで通史を展開し、この『日本近代史研究』では近現代史の課題を掘り下げて取り上げ、授業展開を行っている。本科目の目標...我が国の近現代史の展開を世界的視野に立って総合的に考察させ、我が国近代以降の特色についての認識を深めさせることによって歴史的思考力を培い、国民としての自覚と国際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う。

1年次...地理B(4単位)

2年次...文系 世界史B(4単位) 理系 世界史A(2単位)

3年次...文系 日本史B(4単位) 政治経済(2単位 文系選択)

**日本近現代史研究(3単位 文系選択) 理・文共通 現代社会(2単位)**

今回の研究実践はこの日本近現代史研究の中で実践した。学習内容と研究内容は次の表のとおりである。

	学 習 内 容	研 究 内 容
1 学 期	開国と幕末の動乱 明治維新と富国強兵 立憲国家の成立と日清戦争 日露戦争と国際関係	<b>実践 1</b>
2 学 期	第一次世界大戦と日本 ワシントン体制 市民文化 恐慌の時代 軍部の台頭 第二次世界大戦 占領と改革	<b>実践 2</b> <b>実践 3 実践 4</b>
3 学 期	55年体制 高度経済成長 冷戦終結と日本社会の動揺	

## 5 授業実践

### (1) 実践1 絵画(ピゴアの風刺画)を活用した授業展開

絵画資料への興味・関心は高かった。班ごとの話し合いは、普段、講義式の授業に慣れている生徒には新鮮に映ったようであり、授業へ取り組む姿勢としては効果があったと思われる。しかしながら、班内でも積極的な意見交換が行われるところもある半面、自分の意見を述べたりすることに慣れていないということもあり、意見のやりとりが上手くいかないところもあった。そのため、資料の読みとりに手こずるところも見受けられた。自分の意見形成を論理的に組み立て、他者へわかりやすく説明できることは、歴史的思考力を形成するうえでも重要なことだと思うので、次への課題にしていきたい。

(紙面の都合上ここでは概略のみを示す)

### (2) 実践2 文献を活用した授業展開

ア 目標 満州に関わる資料を見て、当時の指導者やジャーナリストがどのような意見や考えを持っていたか読み取り、時代背景を考察しながら、日本がどのような過程で満州事変へ進んでいったのかを理解する。また、自分の考えを主張し、討論することにより、自己の意見形成や歴史的思考力を育成していきたい。

イ 指導計画 石橋湛山の「満蒙放棄論」と松岡洋右「満蒙はわが国の生命線である」

(ア) 満州事変前後の時代背景を調査する。 インターネットや図書室での調べ学習 (1)

(イ) 「誰の意見を支持しますか」 意見をワークシートに記入する。(1)

(ウ) 「誰の意見に反対しますか」 全員が意見をまとめて発表する。(1)

17人の少人数による講座であり、ひとりずつ全員に意見を述べさせた。

(エ) 「他の人の意見を聞いて自分の意見を発表する」 全員が意見をまとめて発表する。(2)

(オ) 自己評価とアンケートの実施 ( )内の数字は実施時間数



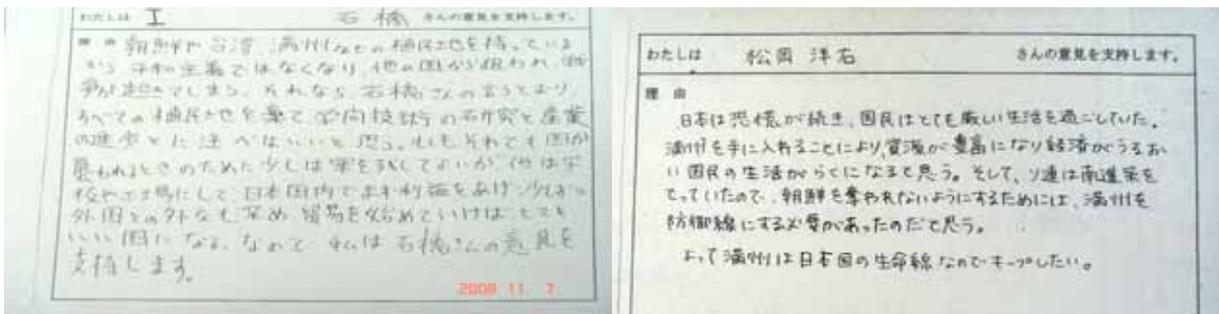
コンピューター室での調べ学習の様子  
【あなたは誰の意見を支持しますか】



自分の意見の発表の様子

松岡洋右を支持 日本は恐慌が続き、国民はとても厳しい生活を送っていた。満州を手に入れることにより、資源が豊富になり経済がうるおい、国民生活が楽になると思う。そして、ソ連は南進策をとっていたので、朝鮮を奪われないようにするためには、満州を防御にする必要があったと思う。よって満州は日本国の生命線なのでキープしたい。

石橋湛山を支持 満州を支配するということは、植民地として支配することであり、満州の人々がかわいそうである。もし自分の国（日本）がどこかの国の植民地になるなんて絶対に嫌である。この気持ちはどこの国へ行っても同じであると思う。相手側の気持ちを考えたら支配など決してできないはずだ。武力ではなく、平和的に日本を変えさせ、世界からも認められてもらう国にしていこうとする石橋湛山の意見に賛成します。

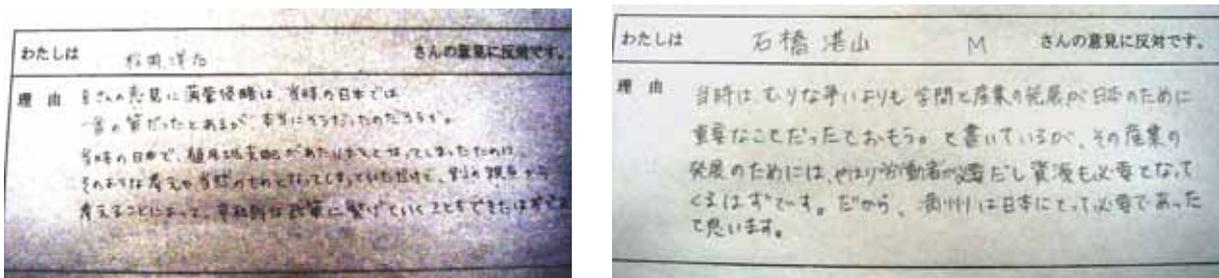


生徒の賛成意見の事例

【誰の意見に反対しますか】

松岡洋右に反対 「満蒙はわが国の生命線」と言って満州を支配することで、日本への権益は確保できるかもしれないが、それによって生まれる中国や他国からの反日感情は大きいと思う。それは、日本にとっていつか大きな損失になると思う。満州は日本の生命線ではなく、そこに住んでいる人のものであると思う。

石橋湛山に反対 戦争が無意味なことは分かります。ただ、平和主義を唱え、植民地をすべて放棄したら、日本はやっていけないと思います。日本の資源が尽きる前に満蒙の資源を確保する。だから、満蒙を利用せざるをえないと考えます。



生徒の反対意見の事例

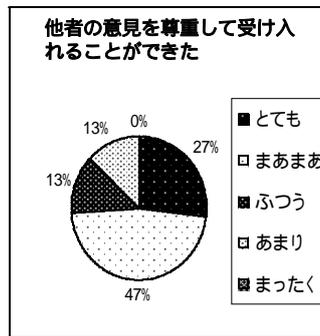
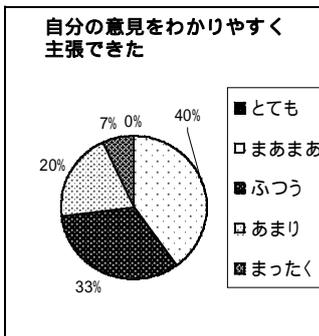
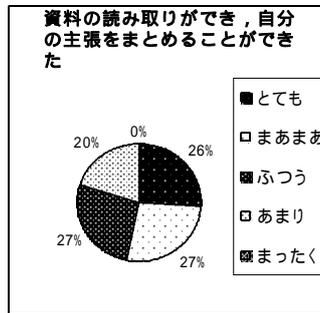
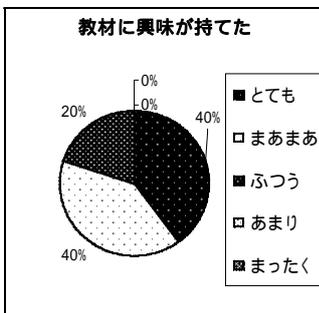
【他の人の意見を聞いて自分の意見を発表する】

やはり、石橋湛山の考えに賛成である。それは、現在につながるものとして、最も有益な論を持っていたと考えるからだ。資源がないからといって他国を侵略することは本当に許されることなのだろうか。いつかしっぺ返しを食らい、世界から孤立していくことになる。

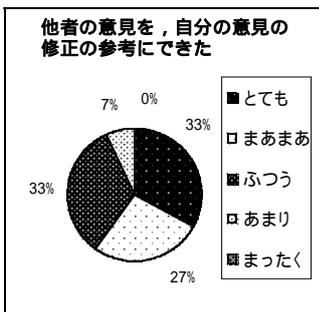
植民地をすべて放棄することはやはり難しいと思う。しかし、この満州を手に入れることによって戦争が起きることもありえるし、その戦争によって多くの犠牲者がでてしまう。でも、日本の状況を考えたら満州は手に入れておいた方がよいと思う。

自分は松岡洋右を支持していたが、石橋湛山の意見に賛成の人たちの意見を聞いて、考えが変わった。日本の都合で他国を犠牲にすることはまずいことではないか。戦争ほど無意味なものはなく、平和を重視する彼の考えが良いと思った。

ウ 検証



左のグラフは授業のあと、生徒に自己評価をととして、アンケート調査をおこなった結果を表したものである。教材について80%の生徒が興味を持つことができた。資料の読み取りができ、自分の主張ができたかどうかについては、70%の生徒がおおむねできたが、その半面30%の生徒ができなかった。また、他者への説明となると半数の生徒が普通ないしうまく説明できなかったとしている。自分の意見を論理的にまとめ、発表する作業に苦手意識を持つ生徒が多いようである。大学の推薦入試等でプレゼンテーションを課す入試も増加していることもあり、経験を積ませる必要があると感じた。



いろいろな意見を聞いて面白かった。最初に書いた時の自分は考え方が足りなかったと反省した。もっといろいろな角度から物事を見なければならぬと思った。

資料に出てきた人たちのように、人はそれぞれ違う意見を持っていて、それについて私たちも違った意見を持っていて、いろいろな考え方があるんだなあと思った。どの意見が正しくて、どの意見が悪いなどではない。しっかりみんなの意見を聞いた。

わたしは、今まで討論する授業をしなかったので、良かったと思う。今回は「満州事変」についてだが、違うテーマでもやってみたいと思った。次にこういう授業があったら、もっと自分の意見を上手く表現したいと思った。

「満州事変」という題材であったが、生徒は興味を持って取組んだようである。また、歴史をた

だ暗記物として覚えるだけでなく、自分の意見を考えたり、述べたりする作業をとおして、考える学問であることを感じてくれたようである。ただ、資料の内容理解や時代背景については知識不足・理解不足の生徒もあり、十分な時間をとって説明することも必要であった。満州の状況を生徒がどれだけ理解していたかという点において課題が残った。おぼろげな知識や理解では討論にはならない。「考えさせる」ためには事前にしっかりと学習することも大切であり、そのためには講義をとおした授業の効果は高いのではないかと思う。また、生徒自身による調査・研究の準備期間をしっかりとって臨むようにしていきたい。討論を始めると時間の制約があるため、議論が深まる前に授業が終了してしまう。時間配分の工夫が必要である。

今回の授業をとおして、生徒が発見した課題

- ・政治家の意見だけでなく、国民ひとりひとりの意思はどうであったかを知りたい。
- ・当時の日本では平和を望むことは本当にできなかったのか。それはなぜなのか。など

時間の都合上、これ以上踏み込むことはできなかった。これらの課題を生徒がより深く考察できるよう時間をしっかりと確保し、レポートで報告させるような方法をとってもよかったのではないかと思う。ただ、生徒が歴史を考え、歴史を追究しようとする姿勢がみられたことは、大きな収穫であったと思う。

### (3) 実践3 写真を活用した授業展開

ア 目標 1枚の写真から戦争について考察し、その時代の人々の立場からこの時代に生きた人々の生活を深く考える。また、班で話し合うことにより、複数のものの見方や考え方があり、他者の考えを冷静に真面目に聞き、自らの意見を形成できるようにする。

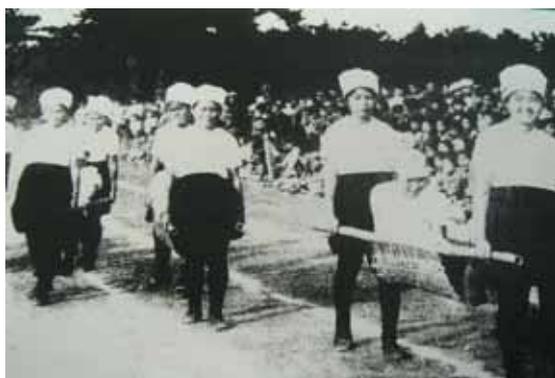
イ 指導計画 1時間目

段階	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点および評価
導入 15分	写真を見て、時代考察を行う。	写真を見て、状況を把握し、時代の確認をする。 疑問点をあげ、ワークシートへ記入する。 いつ頃、誰が、何をしているのだろう？	自由な発想を大切に、観察に十分な時間をとるようにする。  2枚の写真を一緒に班ごとに配布。
展開 25分	班で話し合ってみよう。	疑問点について、班に分かれて話し合う。 なぜ～しているのだろう	論点がずれないように指導する。 歴史的な事実に基づいて話し合いが行われているか。 (知識・理解) 真面目に話し合っていたか。 (関心・意欲・態度) (技能・表現)
まとめ 10分	課題をつくらう。	疑問に上がった点について班としての課題をつくる。	何が班の中で争点になったか、確認する。 課題を見つけだす事ができたか。 (思考・判断)

授業で使用した写真（いずれも現茂原高校）

昭和13年 静和高等女学校の運動会の様子

昭和14年 長生高等女学校の軍事訓練の様子



出典『目で見る茂原・勝浦・長生・夷隅の100年』（郷土出版社）

2～4時間目 班別調査学習

5時間目 班別発表・評価と自己評価と他班からの評価を行う。

ウ 発表内容

	発表内容
1班	なぜ、女子まで戦闘にかり出されたのか。日本の戦争に対する考え方の変化について
2班	なぜ、国家をあげての戦時体制になったか。戦時中の年齢別の子供の役割について
3班	戦時中の教育で何があったのか。現在の学校との違いについて
4班	なぜ、学校なのに軍事訓練が行われたか。戦争中の学校のカリキュラムについて



班別の話し合いの様子

テーマの設定は「戦時下の国民生活」ということをもとに生徒に自主的に決めさせた。教材で使用した写真が学校をテーマにしたものであったので、学校を中心に取り上げた班が多かった。疑問点に対して、まず、仮説を立てさせ、それについて教科書・資料集・図書室を利用した調査学習などにより検証し、結論をまとめさせた。2班を例として取り上げてみたい。

2班 **仮説** [戦時下の人手不足によって、非戦闘員であったひとが戦闘員にまわったことによって軍需物資を製造する者が減ったため、子供までかり出された。]

検証（教科書・資料集・図書館での調査）

**結論** [ 国家総動員法が制定され、戦争遂行のために国民生活の全分野を統制する権限が政府に与えられ、これに基づいて国民徴用令や生活必需物資統制令などが出された。学生も徴兵年齢が引き下げられ女子も軍需工場での労働が義務づけられた。仮説で考えたよりも、人々が戦争に巻き込まれた背景には深いものがあった。 ]

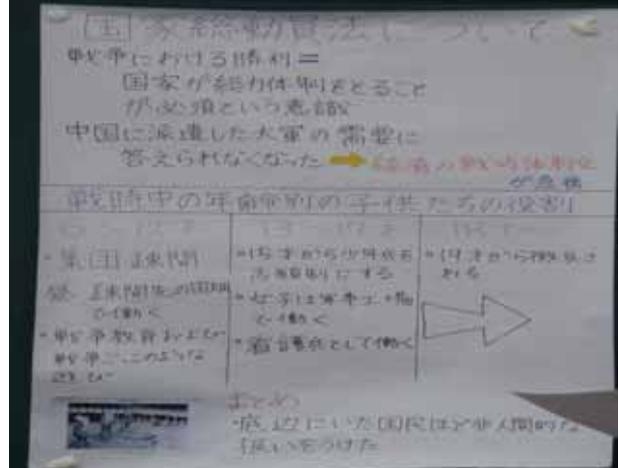
**まとめ** [ 戦争に行ったのは激戦地に赴いた兵士だけではありません。一般の国民はどれほど非人間的な扱いを受けたでしょうか。純粋な子供ならなおさらです。私たちは自分の子ども達のためにもこのような戦争を二度と起こさない努力が必要だと思います。 ]

**今後の課題**

- ・ 風船爆弾の作り方や威力やその被害について。
- ・ 戦時中の学校生活について。学校教育がどのように行われていたか。より詳しく知りたい。
- ・ 就学前の子ども達はどのように過ごしていたのか。



班発表の様子

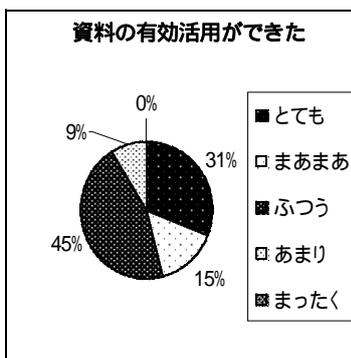
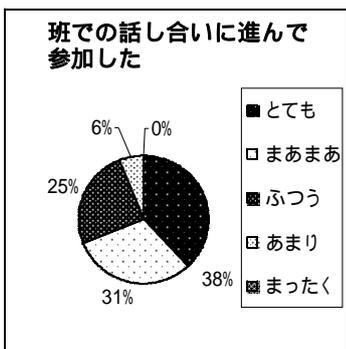
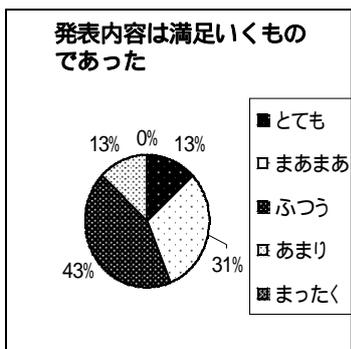
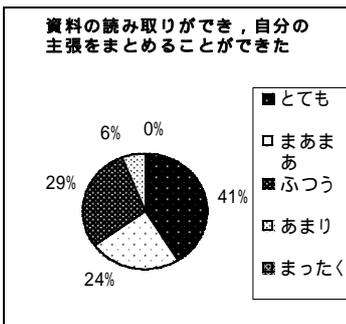
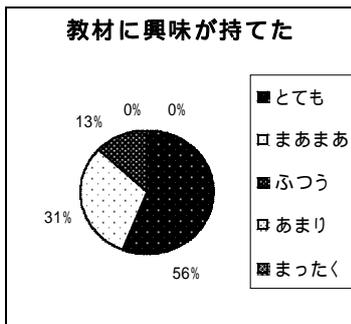


生徒の発表内容

**工 評価**

- 関心・意欲・態度 ...班での話し合いに進んで参加できた。  
 ...自分の考えを意見として他者へわかりやすく主張できた。
- 思考・判断 ...戦争中の国民生活について調査できた。  
 ...発表課題の仮説に対して、結論がまとめられている。
- 資料活用の技能・表現...情報を収集するのに有効な資料を活用できた。  
 ...資料を用い、発表内容をわかりやすくまとめ、整理し、発表できた。
- 知識・理解 ...テーマについて理解し、歴史的な知識を整理できた。

オ 検証



写真は本校の前身である静和高等女学校と長生高等女学校の時代の写真を使用した。生徒は自分の通っている学校での出来事であるだけに、関心の度合いは大きかった。地域の教材を使うことは、生徒の強い関心を引き出すことがわかった。写真に疑問を持った生徒は本校の創立100周年記念誌を調べ、実際の軍事訓練について調査していた。

また、インターネットだけではなく、図書室での文献資料を丁寧に調査する姿も見受けられた。ある班は他県の授業カリキュラムを調べ1週間の時間割表を作成した。また、当時の運動会の種目を調べ、それをも

とにプログラムを作成し、発表を行った。発表においては、生徒はわかりやすく、自分たちの研究内容をまとめていた。

人前で自分の意見を言うことについて、実践1では上手くできなかったとする生徒が多くいたが、今回は、自分たちの意見を上手く説明できたとする生徒が多数を占めた。また、まとめ（結論）では、自分たちの調査結果を踏まえて、平和に対する自分たちの考えを述べる班も複数あり、歴史認識の深まりを感じさせた。

班の分け方であるが、今回は座席順に教師側から指定して割り振った。班での話し合いは、おおかたの班はにぎやかに行っていたが、ある班は、その中に、発言力のある生徒がいなかったため、こちらが考えているようには進まず、話し合いそのものは低調気味であった。生徒による自主的な話し合いを行うことが重要な要素であるので、すべてにこちらが介入するわけにはいかないが、このような場合「紙上討論」をおこなうということも有効な方法であると思われる。調べ学習や発表という段階になると、単純に教師が割り振った班となると、なかなかうまくいかないことが多いという実感である。効果的な班分けはどのような構成がよいか、研究の余地がある。

生徒の感想の事例

- 他の班の発表を見て、より深く戦争について分かって良かった。今度は敵国であったアメリカ側からの視点、意見や生活の様子を調べてみたい。
- 発表はそれぞれのグループが個性的で面白かった。いろいろな角度から当時の国民生活を見ることができて勉強になった。機会があればもう一度やってみたい。
- 調べていくうちに、戦時中の学校の背景がだんだんと見えてきた。戦争中の生活をもっと深く学びたいと思った。現在では考えることができないような学校生活だが、私たちは、同じことがおきないように努力していかなければならないと思った。

#### (4) 実践4 音声・写真を活用した授業展開

ア 目標 資料を用いて戦争の追体験を行う。この時代に生きた人々が何を思い、何を感じながら生活を送っていたのかを資料をもとに情報を読みとり、分析を行い、考察する。また、戦争が日本国民に及ぼした影響を考え、これからの日本のあり方を模索させる。

#### イ 指導計画

(ア) 終戦の詔勅(玉音放送)を聞く。『天皇の玉音放送』小森陽一(朝日文庫)の付録CDより音声で聞いたあと、原文と現代語訳を読ませる。

この放送を聞いている人々の写真・皇居二重橋に駆けつけた人々の写真を見せる。

この放送を聞いた人々はどう感じたか。

なぜ泣いているのだろうか。

自分の意見をまとめる。班でこのことについて話し合う。



『週刊朝日百科 日本の歴史111 敗戦と原爆投下』(朝日新聞社)より

#### 生徒の意見

- ・戦争に負けてしまったという悔しさ
- ・敗戦が信じられないという驚きとショック
- ・もう戦わなくて良いという安堵感
- ・自分たちの身にこれから何が起こるかという不安

(イ) 終戦の日の日記 『千葉県歴史 近現代8 資料編(社会・教育・文化2)』を読む

資料を読んでどう思ったか。(ア)と(イ)で(1.5)

(ウ) この戦争に敗れたことを国民はどう思ったか。

自分の意見をまとめる。 班でこのことについて話し合う。

女性は戦争に負けたことへの悔しさよりも、安堵感を感じた人が多かったのだと思う。それは父や兄弟、夫や息子を戦場に送りださなければならないという辛さがあったからだと思う。

本土決戦にならなくて良かったと思うけれども、多くの人々が戦争にかり出され、多くの命を落としてしまった。もっと、早く戦争を終わりにすることはできなかったのかなと思った。

(エ) この戦争は国民にとってどのような戦争であったか。 全体での討論。(ウ)と(エ)で(2)

国のために全てを尽くしてきたのに負け、多くの人々が亡くなり、自分たちには何一つ良いことがなく、ただただ辛い日々を過ごただけであり、もう二度とこのような経験をしたくない、次の世代にもこのような経験を味あわせたくないと思つたと思う。

血と汗、泥にまみれて得たものは敗戦の二文字。こんな空しいことはない。国の威信も落ち、国益も損なつた。人々は悔しかったと思う。だけど、それと同時に自分や親しい人が死ななくても良いという安堵感もあったと思う。

(オ) 自己評価と戦争認識に関するアンケート(0.5)

討論によって自分の意見がどのように修正されていったか。もしくは、自説がどのように補強されていったか、確認させる。( )内の数字は実施時間数

戦争は現実味もなく、遠い昔のこととしてしか捉えていなかった。でも、今回の授業をとおして、戦争について深く考えることができた。ただ自国の利益だけを求めた戦争は、国内外に住む人々に悪影響を与えただけである。この戦争を国民の徒勞で終わらせないために、私たちは歴史の真実を知って、理解していくことが大切であると思う。

戦争はいけないもの、悲惨なものと思っていた。話し合いをしたり、授業で考えていくうちに、「なぜ、戦争が正当化されていくのか。現在の私たちは戦争は“いけないもの”として教えられているのと同様に、戦争を“正しいもの”として教育を受けた場合はどうなるのであろうか」という疑問がでてきた。「戦争の二度とおきない日本」の実現について本気で考えなければならぬと思った。

ウ 評価

関心・意欲・態度

- ...班での話し合いに進んで参加できた。
- ...自分の考えを意見として他者へわかりやすく主張できた。
- ...戦争を振り返って、見直す態度を養えた。

思考・判断

- ...戦争が国民生活に及ぼした影響について客観的に分析し、この戦争の意義について考察できた。
- ...話し合いにより自分と異なる意見を理解し、賛成の意見を言えたり、反対の意見を言えた。

資料活用の技能・表現...事実に基づいた資料の内容を収集し、読みとり、整理し、活用できた。

知識・理解

- ...太平洋戦争の歴史的事実を理解できた。

エ 検証

教材への興味・関心は8割を超す。写真や音声などを教材化することにより、生徒の学習意欲が上昇すると思われる。班別の話し合いにおいては6割強の生徒が進んで参加したと答えている。これは実践2の時と横ばいの数字だが、自分の意見を他者へわかりやすく説明できたという点においては、前回は47%の生徒ができたが、今回は56%に上昇した。戦争が及ぼした国民生活について考察できたかという点においては75%の生徒ができた。資料にふれることは、生徒が歴史を考えるという姿勢を持つきっかけのひとつになるのではないと思う。

生徒の感想の事例

玉音放送がすごく印象に残った。リアリティがあった。なんとなく体験ができたと思う。

日記を読むことによって、深く知ることができた。何より、自分の意見をしっかりと、みんなに伝えられたことが良かった。考えることは大事だと思う。これからの日本をどうするべきかあらためて考えさせられた。

当時の人の考え方をすることで、戦争に向かうこととなった背景や人々の心理を考えることができた。

6 おわりに

質問事項	事前	事後	質問事項	事前	事後
日本史の勉強は大切だ。	88.2 %	90.3 %	日本史の勉強で学校の図書館等を利用して資料を集めたり活用していますか。	0 %	97.0 %
日本史を勉強すれば私は社会の一員としてよりよい社会を考えることができるようになる。	35.3 %	57.3 %	日本史の授業で、自分の考えたことや調べたことを発表する学習は好きですか。	1.8 %	67.0 %

問 戦争に関する認識が深まりましたか。 はい 82% ふつう 11% いいえ 7%

問 今回の授業をとおして「歴史を考える」ことができました。 はい 94% いいえ 6%

今回の授業の実践で、生徒は「自分の考えたことや調べたことを発表することが好きになりましたか」という問いに対して1.8% 67.0%にのぼった。生徒は次のような感想を述べている。

- ・よりよい発表にすため皆で調べて知識をつけたり、受け身でいる授業よりも面白かった。
- ・時代背景を考えながら、自分の意見を述べるのが新鮮でよかった。
- ・自分と異なる意見を聞くことで多角的なものの見方ができて、勉強になった。

生徒には具体的な資料を提示することにより、歴史を追究しようという姿勢がでてくるようになった。また、その資料が地域の素材であると、より一層の効果をもたらすことができた。発表や討論を加えることにより、他者の意見を受け入れながら、ひとりひとりが思考し、表現する力を獲得し、自分自身の意見形成を促すことになっていったと考えられる。班別で行う場合は、フリートーク形式で生徒が自由にそして気楽に意見を述べ合うことができる。アンケートの結果から見ると、歴史を学ぶことはただ単に「暗記する」ことだけではないということが、実感されたようである。また、われわれ教師側のアプローチの仕方によって生徒は少しずつ変化していくことがわかった。文献、絵画、写真、音声など具体的かつ地域の素材を使用すると生徒は普通の講義形式の授業よりも格段と目の輝きが増す。近現代史の分野では映像資料を使用することも良いのではないかと思う。今回の研究実践ではその資料をもとに生徒自らテーマを設定し、生徒自身で考え、自主的な歴史追究もなされたと思う。今回は学校設定科目での実践であった。受講者は少なからず「日本史」に「興味を持っている生徒」が大多数であったが、今後は「興味のない生徒」にも同じアプローチでできるのかどうか、また、できない時に生徒が歴史を学ぶことの楽しさや歴史を考えることがどのようにしたらできるか、更に研究をしていきたいと考える。

最後に、2年間ご指導いただいた指導課の先生方や教科指導員の先生方、そして、今回の授業実践に熱心に取り組んでくれた生徒の皆さんに感謝申し上げます。

- 参考文献**
- 『石橋湛山評論集』松尾尊兌（岩波文庫）
  - 『目で見る茂原・勝浦・長生・夷隅の100年』（郷土出版社）
  - 『天皇の玉音放送』小森陽一（朝日文庫）
  - 『週刊朝日百科 日本の歴史111 敗戦と原爆投下』（朝日新聞社）
  - 『千葉県歴史 近現代8 資料編（社会・教育・文化2）』（千葉県史料研究財団）

